

「雨織（アマオリ）」

瀬戸内町立秋徳中学校 一年 濱田 鈴

「あ、雨。……運悪いなあ。」

虹花は、学校帰りの道を急いだ。しとしとと音もなく降る雨は、まるできりみたいに細かい粒となって虹花を包み込む。べつとりとぬれた前髪をはらって空を見上げると、何だか不思議な気持ちになった。

「今日の雨って、何だか変……。」

白に近い淡い灰色の雨雲は、空一面に広がっていたが、ところどころに小さな切れ目があるのか、やわらかい光がいく筋も降りてくる。

「きれい……。」

美しい雲に見とれながら、角を曲がったとたん……。今まで歩いていた街並みが、煙のように消えてしまった。そのかわり虹花の目の前に広がっていたのは、幼いころ読んだ絵本の中に出てくるような美しい森だった。

「夢見ているのかなあ。」

夢か現実か分からないまま、虹花は森へ向かって歩き出していた。不思議なことにこわさも心細さも感じない。むしろなつかしいような安心感に包まれていた。

しばらく歩くと灰色の木のようなものが見えてきた。近づいてみると……。

それは塔だった。

白く淡い灰色は、今日の空の色そのものだった。塔の周りには木がなく、そこだけ雨が降っている。

スーストン。スーストン。

「あれ、何だろう。この音。」

塔の中から、風のような音が聞こえてきた。

スーストン。スーストン。

ひんやりとした、それでいてやわらかく心地良い音だ。

「誰かいるのかなあ。」

虹花は入口のような小さな穴から、塔の中に入ってきた。

窓が一つもない塔の中はうす暗かったが、てっぺんに穴があいていて、そこから光が差し込んでいる。その光は一人の不思議な少女の姿を照らしていた。その少女は銀白色のまつすぐな髪を腰まで垂らし、死んだ人のように青白い肌をしていた。白い衣をまとったその姿を見て、人でないことが何となく分かった。

「ゆうれい……かなあ……。」

しかし、恐怖心は全く感じられない。静かな存在感は、まるで満月のような。冷たく、そして優しいオー

ラがただよっている。

スーストン。スーストン。

さつきから気になっていたこの音は、この少女のもだった。少女はいすに腰かけて、手足を不自然に動かしていた。

「ねえ、あなたは何をしているの。」

スーストン。スーストン。

少女が手足を動かすたびに、あの音が聞こえてくる。

「アマオリ。」

少女の声は、ハーブの音色のように静かに響いた。

「アマオリ？」

初めて聞く言葉だ。

「雨を織っている……。」

「えっ、雨……。」

少女はまた黙って、手足を動かし始めた。目をこらしてみると少女の手元に光が当たり、透き通ったはた織り機のようなものが見える。てっぺんにあいた穴から、光と一緒に雨が降りてくる。雨が細い光る糸となり、織られているのだ。

その布は本当にきれいだった。光が当たるたびにキラキラと虹色に輝いた。

「ねえ、この布、何に使うの？」

虹花はそっと聞いてみた。

「天の……神々のお召し物……。」

少女は聞きとれないほど小さな声でつぶやいた。

「神様のお召し物？……神様の服を作っているってこと？」

少女ははたを織る手を止め、はじめて虹花の方をじつと見た。少し青みがかつた黒い瞳は、悲しげに見える。

少女は黙って奥の方へと歩き出した。虹花は少女の後を追ってうすぐらい塔の奥へと進んだ。少女は部屋のすみにある白い箱を手にとり、虹花にわたした。箱を開けると、そこには光が当たっていないのに美しく輝く布が、いくつも重ねられていた。少女は、その中の一つを虹花の肩にかけてくれた。その布は水のように柔らかく冷たく、そして空気のように軽かった。その布をかけてる間、虹花の心の中は清らかな水で洗われているような感じだった。不安やいやな思いが体の中からすべて流れて出ていくような感じだ。

「神様ってこんな気持ちでわたしたちのことを見守っているのかなあ。」

虹花は、世の中のすべてのものが、愛しいようなそんな気持ちになっっている自分に驚いた。

ふと見ると、少女は部屋のすみにある、大きな黒い箱を見つめていた。そのまなざしは、深い悲しみの色

をたたえているように見えた。

「あの黒い箱には何が入っているの？」

虹花の問いかけには答えず、少女は黒い箱の中から、色あせた糸の束を取り出した。箱の中には、色あせた大量の糸がぎっしりとつまっていた。

少女からその糸の束を受けとったとたん、虹花の脳裏に次々と映像が浮かんで消えた。工場の黒い煙、雨で溶けかけた像、死んでゆく魚たち、そして枯れてしまったたたくさんの木々。

虹花は、思わず糸の束を落としてしまった。少女は悲しそうに目をふせると、その糸の束をあゝの黒い箱に入れた。

「あの、今の……。」

虹花は言葉が出なかつた。今見たものは、きつと自分たち人間がこわしてしまつた自然の深い悲しみだ。生きるべき命がたたれ、自然は苦しんでいるのだ。

「雨が美しく清らかでなければ、雨織りはできない。汚れた雨はこんな糸になつてしまふ。このごろは、美しい雨糸はなかなか降りてこなくなつてしまつた。」

少女は悲しげにつぶやいた。

虹花の目から涙がぼろぼろこぼれてきた。

「わたしたち人間が自分勝手に生きてきたせいで、自然が苦しんでいたんだね。でも、でも、今ある自然を

人間も守りたいって思つてるんだよ。」

「人間がそんなこと思うのか？」

「あなたに雨織りの布をかけてもらったとき、わたしには分かつたことがあるの。この世にあるすべての生命が、とても愛しいということ。」

少女が少しほほえんだような気がした。

「今までそんなに深く考えることはなかつたけど、今は、わたしも自然の一部だということがよく分かるわ。自然を大切にしていくなために動き出している人たちも大勢いるのよ。わたしたち人間は、お互いに思つていふことを伝え合うことができる。わたしも自分のために、自然のためになることをしていきたい。だから神様たちにも伝えてほしいの。」

「何を？」

「わたしたちのこと、この世界のすべての生命のこと、ずっと見守つていてほしいということ。人間も自然もきつと美しい自然を取り戻していくから……。」

その時、塔の穴からさしこんでくる光が強くなった。「神々は見ておられる。あなたの言葉を聞いている。」少女の目は、ほほえんでいた。その目の中に吸いこまれそうな気がした。

気がつくくと、いつもの街角に立っていた。

「夢だったのかなあ。」

でも、少女の声や雨の布の輝きを虹花ははっきりと覚えていた。

「約束するよ。」

虹花は空を見上げた。そこには、淡くうすい虹ができていた。

……約束よ……。

いつの間にか、雨がやんだ青空から、少女の声が聞こえてきたような気がした。

